

(翻訳) 名女優物語 (2<sup>註</sup>)

● 作者 不詳  
(訳) 鈴木 暁

彼はモリエールを残して立ち去り、モリエールはなおかなり長い間自分の苦しみを紛らわせる方策を考えていた。しかし彼は何もしないではいられなかったので、女の精神よりも男性のそれの中に一層の連携を見つめる期待を持って若きバロンを味方につけようと考えた。しかし、真剣であるときには、常に策略にかかってしまう危険を冒してしまうものである。そして彼の不幸のこの最後の試練は、忠実さというものはほとんど見られなく、男女両性において欺きの精神とは共通のものであることを思う存分彼に知らしめたのである。

彼は自分の家にバロンを自分の子どもであるかのように留め、そう見せることに何のためらいもなく、よき役者になるべく彼の素質をこの上なく念入りに育て上げた。彼は自分のみが所有するという希望を込めて、彼を厳重に監視した。こうしたことが何の役に立ったか？ 天の書板にはあらゆる種類のコキユがいと書かれていたが、バロンは彼の星を正当化するための考えられ得るあらゆる手段を取ったのである。

ベルガルド公爵はモリエールの最も恐るべき恋敵の一人であった。彼がバロンに抱いていた愛情は浪費にまで至った。彼はつばが金の塊でできている剣を贈ったが、バロンが望み得るものは公爵にとって高価なものでも何でもなかった。それを知ったモリエールはバロンのベッドにまで行き、彼を絶望させるような交際を止めるように権威ある口調で言った。自分とバロンの間で起きていることは、バロンには何の過ちも犯させることはない。というのも、自分はその愛情を友情の名の下に覆っているからだ、公爵の場合はそうではない。そんなことをしたらあらゆる放蕩、とりわけこの種の放蕩にこの上ない嫌悪感を持っている王の下では公爵は完全に破滅してしまうだろう。自分としては、もしバロンを幸せにすることしか目指していない自分の忠告に従おうとしなければ、彼を捨てる決心だと言った。彼は叱責だけでなく、贈り物もし、バロンにもう公爵と会わないと約束させた。

その確約を得てモリエールは幸福の絶頂にあると感じた。しかしこの幸せは長くは続かなかった。彼を怒らせるために生まれてきた妻が彼の新たな愛を乱しにきたのだった。夫と共にいる限り、彼女はバロンを、その関係によって彼女ら夫婦にかなりの災いを起こしてしまう小悪魔のように憎んできたのだった。他の情念同様に憎しみが盲目にさせてしまうように、彼女の憎しみも彼女に、彼が美しいと思わせることを妨げた。しかし夫婦間に解決すべき共通の問題がなくなり、彼女がバロンにすっかりその席を譲ると、彼女は彼を偏見なく見るようになり、彼を心地よい楽しみに利用することができると思った。

幸いにもそのとき演じられていた『プシシェ』が彼女の意図を助け、二人の愛を誕生させた。ラ・モリエールは愛すべきプシシェを演じ、ラムール役のバロンはすべての観客の心を奪った。彼ら二人に寄せられる讃辞は、彼らにも一層の注意とある種の喜びをすらもってお互いを見つめ合うことにし向けた。バロンは残酷ではない。彼はラ・モリエールの心が自分に好意を持つように変化したことに気づくやすぐに、それに応えた。彼女の恋人役を演じるために選ばれた幸福に

対する讃辞を述べて最初に沈黙を破ったのは彼の方だった。彼は、大衆からの賞賛はこの幸福な偶然のおかげであり、自分はその幸せを自然に感じているのだから、そんな役を演じるのは難しくはない。そしてこのようなものを演じるのであれば、常にこの世で最も優れた役者であるだろうと言った。ラ・モリエールは、彼のような男性に与えられる讃辞は、その功績が故であるが、彼女にはそんなものはどこにもない。しかしながら、あれほど多くの情婦を持っていると言われる者の情事は、彼女を驚かせることはないし、彼は舞台上におけるのと同様に女たちに対しても優れた役者に違いないと答えた。このような非難に不快にならないパロンは、彼女に物憂げに、実を言えば自分には女にもてると言ってもよいような事例がいくつかあるが、彼女のためにはすべてを犠牲にする覚悟ができていると言い、こういう際は彼は用心を怠らないものであるが、そのように用心して名を挙げた彼と関係のあるすべての女の最大の怒りよりも彼女の最も小さな好意の方を評価するだろうとも言った。ラ・モリエールは自分が愛されていることに魅了され、我々をくすぐるすべてを美しくさせる自己愛は、彼があれほど多くの恋敵の中から彼女に犠牲を払ったことにえも言えぬ魅力を見つけさせたのである。見たところ、もし彼らの功績に対する嫉妬が彼らを仲違いさせなければ、彼らは長く愛し合ったことであろう。

ラ・モリエールはパロンを愛していたが、彼女は新たな征服をする望みを失ってなく、気に入られたいという心持ちが、少なくとも彼女の情念と同じくらい彼女の心を占めていた。パロンの方はと言えば、ラ・モリエールの中に役に立たない喜びしか見出していないため、彼女に言い寄ってくる者たちを追い払わないように気をつけ、二人が便利、心地よさと必要を保持できるよう望んだ。しかしながら二人の策略は成功しなかった。彼らはすぐに、同じ職業の二人の人間の利害を一致させることが難しいことに気づいた。ラ・モリエールは自分の美しさに世界で最も自惚れた女であったから、彼女に言い寄ってくる者すべてを遠ざけるために自分の愛人が競うようにやってくるのを見ていくばくかの侮辱を感じた。彼女はこのことについて彼に残酷な非難を加え、その口実として、尊敬の気持ちを見せている人がこんな恐ろしい行為に身をやつしているのは悲しいと言った。

パロンはすっかり怒ってこう答えた。彼女にこう話させているのは愛情ではなく、彼の熱心さによってすべての恋敵たちを遠ざけるのを見る怒りからだ。彼女がもはや自分を抑えることができなことはよくわかる。しかし自分に非難を許した口実よりもっとまともな別れの口実を言うべきだ。自分は彼女を束縛するような気質の人間ではないということを知るべきだし、彼は彼女にコケットであるという欲望に決して障害物を置かないと約束している、と。彼らはなお侮辱的なことを言い合い、互いに別れるまでは仲直りしなかった。しかしそれはすぐ後のことであった。というのも、功績が吹き込む嫉妬は不倶戴天の敵を生み出し、従って最初の不仲は以前に増して大きくなってしまうからである。

モリエールは彼らが別れるのを見ていくばくかの満足を得、その忘恩にもかかわらず、パロンにこれまで通りの世話をした。とはいってもこれまでほど執着を持つことはなかった。考えられ得るどんな精神もどんな功績も我々にある種のことがらを保証できないという彼の確信は、人生のあらゆることにこの上ない嫌悪感を与えていたからである。彼にはそのとき、オートゥイユの彼の家より大きな喜びはなかった。というのも、そこに娘を残していたからである。

ラ・モリエールの母親はこの夫婦仲の悪さに心をいたく痛めたため、病気に陥り、すぐに死んでしまった。しかしラ・ベジャールの死も、モリエールの憂鬱も、妻の快樂を止めることはなかった。アベ・ド・ラヴォーや同じような性格を持った多くの者たちが大盤振る舞いをして、彼女の退屈を紛らせた。ラヴォーは驚くべき仕方で行ってきたモリエールの死まで、最も愛された者

の一人であった。

モリエールは長いこと不調であった。不幸な夫婦生活の悲しみと、更に忙しい仕事に原因があった。新作で彼の最後の作品でもある『病は気から』を演じる予定のある日、彼は開演前にかなり具合が悪くなり、病気を理由に休演を詫びるところだった。しかしその公演のために来ていた群衆を見、彼らを追い返す悲しみを考え、我慢して最後まで演じた。しかしその体調が悪化したことには気づかなかつた。しかしながら、彼が死んだ振りをする場面で大変弱ってしまったので、彼は本当に死んでしまったと思われ、彼を起きあがらせるには大変な労力が必要だった。それで彼は終幕まで務めずに、ベッドに行くように忠告されたが、それでも彼は最後まで務めたいと思った。芝居はかなり進んでいたの、それほど失敗することなく、最後まで行くことができると思ったのである。しかしながら、彼が大衆に対して抱く熱意は彼にとっては大変残酷な結末を持っていた。というのも「医者儀式」の中で「ダイオウとセンナ」と言うときに、口から血が吹き出してしまった。観客も座員もこの上なく恐怖に陥ったため、彼はすぐに自宅へと運ばれ、妻が寝室で付き添った。彼女はでき得る限り悲しみに暮れる女を演じた。しかしどんなに手を尽くしても無駄だった。彼は口からすべての血を吐き出すと、すぐに死んでしまった。こうして彼は劇場を残したまま逝ってしまい、今となってはその劇場は非常に多くの哀れな作家たちの大胆極まる餌食となっているのである。

すべての功績のある人々は彼の死を残念に感じた。彼の仲間はひどく悼んだ。妻に対しても、彼の死はこのような状況にあってはより貞淑な女なら受けたであろうと同じほどの苦しみを味あわせた。そして最後の努めは、常に夫に尽くさなければならぬ義務であるから、彼女はその努めを相応しくすべく、あらゆる努力をした。しかし彼女はすぐに、人はそれ以上のものを望むものだを知り、その結果は彼女にモリエールの死を心から悔やませた。彼が息を引き取るや、最大の支えを失ったことを見たラ・トリリエール、ラ・ボーヴァルとパロンはパレ・ロワイヤル座を去り、ブルゴーニュ座に移った。劇団の建て直しのため、ラ・モリエールは最良の役者がいないので、今現在彼女の夫であるグランと、その当時彼女と利害関係がまったく一致していたラ・ギュイヨを入れさせなければならなかつた。不幸が重なったことに、この機会を利用してパレ・ロワイヤルの劇場を国王に求めたルッリは、それを彼のオペラのために獲得し、彼女とその劇団をゲネゴー座に移らなければならないようにした。そして現在ではその二つの劇団が一つになっているのである。

彼女がサン・ジェルマン通りに落ち着くと、まずデュ・ブーレーが彼女の恋人になった。彼はかなりの手練手管の人だった。そこで彼は我々の寡婦に自分を心地よく見せられると思うものを贈り始めた。その贈り物は大変高価なものだったので、魅了された彼女はラ・シャトーヌフに、その額を増やさせるにはどう振る舞ったらいいかを相談した。しかしデュ・ブーレーを、その気前の良さで判断したラ・シャトーヌフは彼女にこう言った。彼には何も赦さないように気をつけなければならない。彼女は頭を使って自分をいたわっているが、彼は彼女と結婚するために恋人の振りをしているのだ。それは例のないことではない。だから秘訣は、彼には断ることのできないようなやり方で、彼をその気にさせることだ、と。ラ・モリエールは彼をのぼせ上がらせ、少しでも理性に相談したら非常に難しく思えるデュ・ブーレーの妻になるという欲望を簡単だと思わせてしまった。野心が自分自身に下さなければならない公正な判断を見えなくさせてしまったのである。この企みを成功させるために取らなければならないことについて、彼女はその相談相手と意見が一致した。ラ・シャトーヌフは、最も確実なのは残酷になることであり、どんな些細な好意までも拒絶するように。しかしそれは、彼女が彼に抱いている愛情を限ろうとする彼女の

唯一の美德によるからなのだと彼に信じさせなければならない、と言った。ラ・モリエールはこの忠告を良しとし、デュ・ブーレーが彼女の家にくると、彼を大変好意のある迎え方をしたので、愛の最後の証しを除いて、彼は彼女に不平を言うことはできなかった。

しかしながら、何でも簡単に手に入れることができると思い上がっている男にはこれだけでは十分ではなかった。彼は未亡人の意図が彼を弄ぶことであることに気づいていて、彼女の慰み者になるのを恐れたために彼女に説明させようと、ある晩、食事の後に彼女の家に行った彼はこう決めたのである。彼は彼女が寡婦にしては並外れて美しく見せていると思い、その美しさのために多大の配慮をすることは、自分の愛にとって凶兆であるとし、かなり悲し気な顔つきで彼女に言った。

私たちの望みはとても異なっております。あなたは今日輝いておられますから、あなたはみんながあなたに会いにくることを願っておいでですが、私は私より幸せな者がいつだってくるのではないかと恐れ、私がこの幸せが許される唯一の男であることを願っているのです。

彼にはどんなに小さな真心でも強調したいと思っているラ・モリエールは尊大な命令口調で答えた。「あなたは私に不平をおっしゃいますが、あなたには特別な配慮をしているではありませんか。男の方というのは皆こうなのですから。与えれば与えるほど満足なさらないのです。もし女が理性的なら、すべての殿方を同じような無関心さで扱うことでしょう。私は優先権が私の愛する方々を敵にすることのないように、このように振る舞いたいと願っているのです。——もし私に対するわずかの好意が私を満足させられると思っておられるのなら、あなたは大変な間違いをしておられる、とデュ・ブーレーが答えた。そうであれば、あなたは別な風に生まれていなければなりませんでしたし、私の情念もこんなに激しくなければなりませんでした。私のように恋する者は、愛する者を所有できなければ何にもならないと思うものなのです。私は自分の功績ではそのようなことは望めないと知っていますが、もしあなたがあなたをお慕いする者の中で最も誠実な者に報いてくれるはずでしたら、私があるに感じているものが私の幸せに応じてくれるのです。——あなたは何を求めておられるのかわかっていらっしやらないのです、とラ・モリエールは答えて続けた。少しでもあなたの情熱をお気に召しておられるのでしたら、それが終わるのを見るのを恐れなければならないのです。ちょうどあなたがもはや何も願うべきものがなければ、必ずやその情熱も終わってしまうように。愛情というものは、私たちの情熱を引き起こす欲求によってのみ支えられるものなのですから、満足するやすぐに消えてしまうのです。少なくともこれまで、私は幸せであるときに誠実な愛人を見たことがありません。それに自分が主であるものに対して焦りや激情をどのようにしたら持つことができるのでしょうか。満足しているときに何を願うことができるのですか、と。常にそうであることですよ、つれない人だ、とデュ・ブーレーは叫んだ。もしあなたがこれまで心変わりのしない愛人など見たことがなければ、あなたは私の中に奇蹟を起こす者を見るのです。自分がすべての男の中で最も幸せであると信じないではあなたを所有できないと強く納得しておりますから、常にそうありたいと願うのはあまりにも自然なことではありませんか。どうなんです、敢えて変などは申しませんが、そのような思いやりで、我が生涯の残りをあなたを崇めることで過ごすという希望をあなたは私から奪い去りたいのですか。」

と同時に彼は彼女にひざまづき、その愛撫によってとても強く彼女を突き動かしたので、もし未亡人が厳しく当たると言った言葉をほとんど信用していなかった巧妙な相談相手がやってきて

二人の話の邪魔をしなかったなら、もう少しで彼女は残酷にまで突き進めることのない自分の氣質に従うところだった。邪魔でひどく侮辱されたデュ・ブーレーは誰にも暇乞いをせず、そそくさと出ていってしまい、それがラ・モリエールをひどく落胆させた。

ラ・シャトーヌフは、こういうことにはあまりにも巧みだったために、最初は何故デュ・ブーレーが怒ってそそくさと出ていったのかわからなかった。しかし彼女はそれを知りたい風を装ってラ・モリエールに、その愛人とはどこまで進んだのかを訊ねた。ラ・シャトーヌフをすっかり信用しきっていた未亡人は、起きたことをほとんどそのまま言った。それを聞いた彼女は、彼が思っていた以上に意表を突くのが難しい男だと悟った。そこでラ・モリエールに美德をしっかり持ち続けるように勧め、付け入る隙を与えなければかなりの幸運が望めるのが見えると言い、人生には責任の取れない遺憾なときがあるし、そのような場合には慎重さはあまり自分を信頼しようとはしないので、とりわけデュ・ブーレーと二人きりになるのは避けるように忠告した。ラ・モリエールは、二人で決めた手続きを経なければデュ・ブーレーに何も許さない、少なくともことが失敗した場合、それはラ・シャトーヌフの過ちであると非難してはならないとした約束を再確認した。「それが一番よ、とラ・シャトーヌフは彼女に言った。あなたがうまくできなければ、私はとても間違ったことになりまますからね。というのも、何が私にあなたがこの世で最も幸福な女であるはずだと言っているのかわからなくなってしまうのですから。」

必要があってラ・モリエールの機嫌を取りにきたラ・ギュイヨが話題を変えさせ、ラ・シャトーヌフは自由に劇団の仕事の話をさせるために二人を残して去った。

しかしながら、ラ・モリエールの相談相手の存在だけが自分の幸せを遅らせていると思ったデュ・ブーレーは、見るからにうずうずした様子で、彼女が前日別れたときと同じ心持ちでいることを期待しながら、翌日ラ・モリエールのところへ赴いた。楽しみそのものよりも大きな予兆を感じていたのだった。それでできる限り最も豪華に身を飾り、普段より2時間も前に行った。しかし非常に驚いたことに、彼女はキューピッドでさえ凍らせてしまうほど身持ちがよかったのである。彼女は、ほとんど無意識的とはいえ、心で感じる以上に心の自然の動きでデュ・ブーレーに前日見せてしまった好意を後悔していたのである。こうして前日に彼女の性向について彼が抱いたかもしれない悪い考えを打ち消して、彼女は誠実な道を除いては彼の願いの絶頂になるという望みを完全にぬぐい去らせるような誇り高い性格を見せたのである。

デュ・ブーレーはこんなに真面目な彼女に驚いたが、彼女が気紛れなことを知っていたので、その秘密を暴くことはせず、普段通りの愛撫によって彼女をその悪い性分に戻そうとだけし、彼女が自らに課した限界には激しすぎる愛撫さえした。初めのうちは彼女も穏やかに抵抗していたが、彼が同じ激しきで愛撫を続けるのを見てひどく怒り出し、彼が美德を持っている女優など一人もいないと思っているうちの一人だとよくわかると言った。

「知っておいてもらいたいわ、と彼女は彼に言った。もしあなたに対する私の誠実な接し方が私のすべてを手に入れられる証拠だと思いいらっしゃるのでしたら、そのようなお考えは間違っておいでだということをお知らせするように接したいと思います。——あなたを怒らせてしまったことをひどく遺憾に思っております、とデュ・ブーレーは言った。でもあなたを見ていると自分を押しさえられなくしてしまう情念は許していただけませんと。——あなたはおっしゃるほど私を愛してはおられません、とラ・モリエールは答えた。そう納得させるには他の証拠が必要でしょうに。——何と不当な！ とデュ・ブーレーが言い返した。何とおっしゃる！ こんなに熱意を示してきたのに、これほど心を尽くしてきたのに、それが真の情熱の印ではないですと。私があなたに感じているものをすっかり納得させるためには他にどんな証しを望むことが

できるというのですか。』

ラ・モリエールはしばらくは何も答えないでいたが、突然、こう言った。「あなたのおっしゃるそれだけの理由が十分あなたの愛の証しになるとお思いですの。この世には愛する女の愛情の印を得て喜ばない男性などいますか。それには女の気に入る配慮によってしか到達し得ないということを知らない人がいますでしょうか。私はあなたが私に対してそのような感情をお持ちであると信じることができます。もし私にそのお気持ちをより優しく、私利のないものだと思わせたいのであれば、私に疑わせないようにしてください、そうでなければ私をそっとしておいてください。こう申し上げますのも今日が最後ですが、艶事では私からは何も期待することなどできないのですから。』

この話はデュ・ブーレーを驚かせ、ラ・モリエールの意図に彼の目を開かせた。彼は自分が決して手にできないものを彼女が誇っていたのだとわかったのである。しかしながら、彼は彼女の狂気を喜び、その過ちのままにしておくよう決心して、それを利用して彼女に少しばかりの希望を与えることにした。彼は彼女の信じ安さ——もはやほんの些細なことに対してもそれを持つときではなかった——を悪用することをためらわなかった。そこで彼は彼女の足下にひれ伏し、彼女は非常に多くの魅力に非常に繊細な美德を備え合わせているので、彼女に納得させようとしても無駄なものを彼女に証しとして見せようと自分に決心させることができるだろう、と誓った。次いで彼はにはごく自然に思える様子で、こんな愛しい女の幸運に貢献できることを喜びたいし、彼女を幸せにするために自分の幸運がより重要であると望みたいが、彼は自分でどうにかなるものしか彼女に捧げることができない。そこでもし彼女がこれで満足してくれれば、自分は喜びの絶頂にあると自分でも思うだろう、と付け加えた。

ラ・モリエールがデュ・ブーレーの話によってどれほど気をよくしたか容易に想像できよう。今度は彼女が彼に、彼は自分がこの上なく心を寄せるすべての男性のうち一人であり、彼女が彼に礼儀に則った証しを与えることができれば、彼女の愛情に満足する理由があるだろうと言った。「何と言われます！ 私はあなたがすぐにでも満足なさるとい証しを立てているのに、何があなたを止めるのですか。あなたは私の真実を疑うのですか。私がある人を騙すような男ですとでも。』

彼女は自分の気性がデュ・ブーレーを不快にするのではと恐れる一方で、これはその通りなのだが、彼女が彼には何の好意も抱いていなく、自分の飛躍しか求めていないと彼が思いやしないだろうかと心配していた。彼は彼女が決断しないことに気づいた。そこで、彼女を自分の望み通りのものにさせようとして、先の誓いの直後に、彼女が彼を拒絶したことに怒った振りをした。「私は大変不幸です、と彼は彼女に言った。私の言葉をほとんど信じてくださらないのですから。私にはあなたがあなたに言うことを疑うぐらいほとんど評価しない男と人生を過ごすことに決めようとなさっておられるなんて信じがたいことです。あなたのつれなさに打ち勝てないので、私は決してあなたに会わないよう決めるべきなのだとよくわかります。』

こう言うと彼は立ち去ろうとした。しかし彼が本当に怒ってしまったのではないかと心配したラ・モリエールは無理矢理彼を止めた。彼には何も拒まないことでしかその怒りを和らげることができないと知ったので、数日も経たないうちに彼女を満足させるとデュ・ブーレーが繰り返したことをそのまま信じることにした。こうして彼はこの世で最も満足して引き下がり、一方のラ・モリエールも自分の魅力に非常に満足していた。

彼女はラ・シャトーヌフに会いに行き、決まったこととして自分の結婚について話し、自分が幸運を掴んでも彼女に対する友情は変わらないと約束し、何が起ころうとも彼女に対する忠実を

守るほどの愛情でデュ・ブーレーを愛してはいないから、自分の行動の為には常に彼女が必要であると、必要のあるたびにその心遣いを拒まないようお願いした。

「あなたに対する私の好意は、あなたが結婚しても終わりませんわ、とラ・シャトーヌフは彼女に言った。でも今は新たな陰謀を考えるとではありませんし、少なくとも最初のうちはある程度節度を持っていなければなりませんよ。でもことはお急ぎなさい。」

ラ・シャトーヌフは絶対的にラ・モリエールを支配していたので、ラ・モリエールは彼女の勧めることにことごとく従い、またできる限り自制もした。彼女はデュ・ブーレーに間断なく約束を守ることを求めたのである。彼は毎日彼女に新たな言い訳をした。あるときは、ことを慎重に進めなければ彼の家族がどんな反対をするかとか、別のときには、彼女が妻となれば、もう何もいたわる必要がないので、彼は自分が望み得る心遣いを彼女にしてもらえないのではないかと心配しているとか。ついにはラ・モリエールのしつこさに辟易した彼は、彼女には考えられ得る情熱は持っているが、強い理由があって、結婚という問題で彼女を満足させることはできないだろう、と宣言した。

この正直な告白はデュ・ブーレーが十分な愛情を持って自分と結婚すると心から信じていた未亡人を驚かせた。彼女は騙されたことを知った怒りを抑えることはなく、その怒りにまかせて、彼を最低の人間扱いした。彼のことを何度も何度も「極悪人」「裏切り者」と呼び、彼女の信じ安さを悪用したことを間違いなく悔いるだろうと誓って述べた後、彼を追い出し、二度と再び彼女の家にくることを禁じた。

デュ・ブーレーはこうした脅迫には一言も答えず、これ以上彼女を怒らせないように、静かに立ち去った。翌日彼はこの世で最も情熱のこもった手紙を彼女に書き、許しを請うた。彼女があまりにも貞淑で、約束なしには彼を幸せにすることができないと知っていたから、愛情が故にこのような策略を使わざるを得なかったが、このような場合、それは許されるべきだ、と。

抜け目ない女であるラ・モリエールは、ラ・シャトーヌフに相談なく彼に返事をしようとは思わなかった。ラ・モリエールは言葉で男性を信じてしまった過ちを彼女に告白したのである。しかし、デュ・ブーレーがとてもせかしたので、そうせざるを得なかったのだし、信じすぎるが故の失敗はこれが最後であるから、どうしたらよいかを教えてください。よくよく考えたことであるが、怒りが収まれば、たとえ彼が彼女と結婚するはずがないにしても、デュ・ブーレーを追い払うことは時宜を得ていない、というのもかなりの額の出費をしてくれるから手元に置いておきたいのだ、と言った。ラ・シャトーヌフは彼女に、どんな決心をしようとも、これ以上長いこと彼と会わないでいることはできない。だから彼に手紙を書くべきだと言った。ラ・モリエールはすぐに次の手紙を書いた。

私はあなたが私を侮辱なされたことをもう覚えていたくありません。というのも、私にはあなたに騙されてもおおあなたを愛するという弱さがあるからです。私の愛情をより許すものにするために、あなたに対する不平を忘れなければなりません。愛が署名しなければならぬ恩赦状を与えるために、私はあなたをお待ちしております。

デュ・ブーレーは美女の足下に駆けつけ、最も愛情のこもったことを言った。彼は巧みにも、二人を気まずくさせた話題は避けた。彼は彼女に数え切れないほどの気晴らしを提案した。それほど気前がよいわけではないが、彼の情念はラ・モリエールに対しては散財を惜しまないものにしたのである。もてなしと宝石は、愛は気質を変え得るということを説得力をもって証してくれ

る。彼は彼女をひどく愛していたので、もしその美女の身持ちがよかったら、二人の交際は長いこと続いたであろう。しかし、彼女がゲランにしたことが彼をひどく不快にしたので、彼は彼女を愛したことをほとんど覚えておらず、その顛末は以下の通りである。

#### 註

本稿は、『コミュニケーション文化』第13号に掲載された『名女優物語』翻訳の続きである。詳しくは第13号 (PP.45-52) を参照されたい。